

消え失せたのであろう。そのとき、藤助が少しでも弱気になって逃げ退いたならば、かならず病にかかっただろうが、一討ちと陽気が立ったのは、かねてからの居合稽古の徳なのであろう」と。

さて、疫病の神は山伏ということは、一般に言われていて、幼年のころからも聞いていたので、疫病をわずらう者は、幻にも山伏の姿をみるのであろう。疫病の神というものがあって、人に取り憑こうとするならば、山伏に化けなくても、見目よい若い女にでも化けたならば大いに取り憑きやすいだろうに、どうして人の怖がる山伏に化けるのであろうか。疫病は、かならず気候不順の年に流行するものである。一家一類、または親しい友達など、看病する者は、かならず同じような気質気性の人が邪気を引き受けてわずらうものである。

他人というとも、自分に虚弱のところがあれば、邪気はその虚に乗じてわずらうことがあるのだと。とりわけ、疫病の神といってその形は定まっていない。もし形があるならば、若い女に化けずに、ゑが天窓の山伏に化けたのでは、化けそこないというべきであらう。

*1 伽夜、そばにいて話の相手をする。また、看病すること。

六 桶屋町籬入六左衛門の疝気のこと

私の町内の下に、水呑み百姓（貧しい小作農民）の伝之丞という者がいた。前々から肩癬（肩こりなど）の症状があつて、ときどき苦しんでいたので、五月中に白部の高湯（白布高湯温泉）へ行った。

ちょうど田植上がりで、在郷からの湯治の人がたくさんで、家中の衆（上杉藩の士たち）もまた多く、東の湯、中の湯の両宿屋はいっぱいで、空き座敷もない。滝打たせ（湯滝に体を打たせる）するにも不自由なので、とにかく、西の湯こそはいいだろうと西の湯へ行くと、湯治人はだれもいなくて大変都合がよく、何度も滝打たせをした。

そうしていると、在方（田舎の方の者）と思われる男が、これまたしきりに滝を打たせていた。毎度言葉を交わしていると、この男の痩せていること、箸に目鼻ともいうよううで、手足は細い火箸のようで、ほんとうに骸骨と言おうか、餓鬼とでも言おうか。

伝之丞が、

「そなたは、在の者か。今年はずであるが、水はいつもどおりで、みな田植えが終わったということだが。そなたは下長井か。ところで、そなたは長患いでもしているのか。痩せ

ているのはそういうことだろうが、全身がみな火傷やけどのように見えるのはどうしてか」と言うと、その男はそこらを見まわし、人もいなかったので、

「今は、何をか隠しませう。私は東寺町下、桶屋町の六左衛門の疝氣*2仙助せんすけという者です。六左衛門が壮年のころより体内に住んで、年を経ていくにしたがって横領していき、六左衛門は今では近い町に並ぶ者がいないほどの疝氣持ちになり、いつも苦しんでいます。」

しかしながら、六左衛門は吝坊しんぼう（けちん坊）の儉約者なので、いまだに赤湯あかゆや姥湯おばゆなどへの湯治もしないで、ひたすら灸責きゆうせきめなので、長年積もって灸の跡は五万三万の数ではありません。それでご覧のように、全身が焼け焦げて見苦しくなりました。この間も余り余りに灸責きゆうせきめにあい、なにぶん居ることができないので、保養のため四五日前より湯治に来ました。失礼ながらご覧ください」と言う。

すり寄って見れば、背中の肩先から下まで、骨の上だの区別なく、胸の内側が少し空いているぐらいで、腰から下は足の甲にいたるまで、針を落とす場所もなく、赤胴*3を見るように焼け焦げている。

伝之丞は不審に思つて、翌日また同浴のとき、
「そなた、これからどちらへ」

とたずねると、仙助は、

「またまた六左衛門のところへまいります、滝を打たせたら、思いの外氣持ちがよいので、もう四五日逗留とうりゅうしようと思ひます」と言う。

伝之丞が、

「自分も疝氣で、季節ごとに腰が引きつって苦しむことがあるが、これはどのようにして治せばよいのだろうか」とたずねると、仙助は、

「赤湯や姥湯の温泉へ二回り、三回り*4ずつも入浴すれば、完全にとはいきませんが、一年経つてもおこりません。疝氣の症状は、食事は進むものでございます。温かなものがよろしいです。冷たいものは疝氣ざんきに障ります」と答えた。伝之丞は、

「そなたの好物とか嫌いなものとかはあるのか」とたずねると、仙助は、

「私が嫌いなものといえば、第一に熱湯、赤湯、姥湯、にんにく、その外温かいものは好みません。好物といえ、すべて冷たいもので、また、東風こち（東から吹いてくる風・春風）

がそろそろと吹きだすと、大変気持ちがいいものです。六左衛門のところは東川原の吹き上げで、少しの東風でも直接吹き込んで、疝氣の住所には最上のところでございます。露のとうは大変好物、その外は焦げたもので、豆煎りや焼き飯の焦げた皮は、大変こころよいものでございます。

疝氣は肝の臓より起こり、肝は怒りや腹立ちを持ち前にしているので、六左衛門は、疝氣が起されれば、やたらに腹が立って、悪くもない家の者を叱りつけ、ひどい時には自分が結った桶を才槌でみじんに打ち砕くことも時々あります。これは疝氣の大盛りのおどろきでございます」

と答える。

伝之丞、

「そなた、また桶屋町へ帰ることを言われるが、どのようにして六左衛門に取り入るのか」

「それでございます。六左衛門は、前から豆煎りを大変好物にしているので、いつも細工箱に入れておいて、ちよつとの手休めの時にも豆煎りを食べるので、私は、湯から帰ったら、四五粒の豆煎りになって細工箱へ入っていれば、六左衛門は見つけてすぐに食べるでしょう。」

あなた様も疝氣症でございますので、なったならば、かならず冷えたものはやめて、じょうを時々召し上げれば、大変養生になります。私には禁物でございます。

今日は、いよいよ御帰湯になりますか。きつと遠からずお目にかかるでしょう。かならず私が申上げたことは、御口外くださいませように」と言つて別れた。

伝之丞は、昼食後、高湯を出発したが、途中で、「さてさて、妙なこともあればあるものだ、実か嘘か、あの痩せ男にだまされたか、何にしても桶屋町へ行ってみよう」と思いながら、家へ帰った。

伝之丞は独身者なので、自分で火をおこして食事をして寝たが、翌朝少し早くに桶屋町へ行き、「六左衛門のところは」と町で尋ねると、「こちらです」と言う。

「六左衛門殿はおいでか」

と言うと、女房が出てきて、

「四五日前、川井の酒屋へ桶を結い立てに行っていて、昨夜帰って来る予定でしたが、泊まっております。今朝は帰るでしょう。何かご用でもございますか」と言う。

「六左衛門にじかにお話したいことがあって来ました」

「それならばそちらにお通りください」
 と言う。中へ入って見まわすと、暮らし向きは豊かに見える。

まもなく六左衛門が帰ってきて、

「何かご用でもございますか」

と言うので、伝之丞は、

「用事といって特別なことではないが、しかし、他聞たがえもどうかと」

と言うと、

「それならば」

と言って、一間へ案内して、茶やたばこなどを差し出した。

伝之丞は、亭主六左衛門に面談したところ、高湯で同浴した仙助である。

「そなたは仙助か」

と言うと、

「私は六左衛門」

と言うので、

「仙助という者は」

とたずねると、

「このあたりに仙助という者はおりません」と言う。

なおなお、不審に思っで見直すが、やはり同浴した仙助である。いよいよ不審に思っ、それから小声になって、高湯で仙助と同浴したことや仙助の人物などこまごまと話した。

すると、六左衛門は手を打って驚き、

「なるほど、私は長年疝気持ちで、ときどき患っていたのですが、十日ばかり前よりさっぱり足腰が痛まないので、このたび川井の酒屋へ桶の結び立てに行っていて、ただ今帰ってきたところですよ。まことにご親切なことで」

と言って、とても感謝して、吸い物や酒や肴さかなを出してくれた。伝之丞は大変ごちそうになっって帰っていった。

あとで、女房が、

「密談は何事ですか」

と尋ねたので、六左衛門は、

「こういうことだった。ほんとうにたわいもないことだ。そうしてまた、前からの知り合いいでもない南原みなみはらの人がわざわざ尋ねてきて、だまして惑わすようなことでもない。その仙助という者が高湯に入浴中は、自分の腰膝足等の痛みがいつさいなく、すでに川井まで

歩いて行ったけれども、少しも痛みがないのは不審なことだ。何にせよ、焦げたものはひとまずやめよう。南原の人が前もって自分の好物の品々を知っているわけもない。何といっても、このところ痛みがないのがしあわせ」と言った。

そして、盆市前の結い立ては忙しいと、早朝から暮れまで稼いだけれども、腰や膝の引きつりもなく働くことができた。

ある朝、細工所へ出て、例の細工箱のふたを開けると、大粒の豆煎りが十ばかりある。何げなく口に入れようとしたが、「いや、あの人が言ったのはこの大豆であろう」と気が付き、豆を取って打盤うちばんに載せ、「につくき豆め」と、才槌でみじんに砕いて、茶の間の燃え火にはたき焼くべてしまった。

それからは、六左衛門、疝気がさっぱりと根抜きになったようで、歩くのも思うまま自由になった。そして、あの伝之丞のところを尋ねて行って、謝礼として、五升入り桶二つ、三升入り桶一つ、そのほか肴を添えて持参し、くり返し礼を言っ帰ったという。

それから六左衛門は無病息災むびくさいになり、家業に精を出し、家は富み栄えて、子どもたちも成長して、なおなお家業繁昌して、賑やかに暮らしたということである。

これは、宝暦（一七五一―一七六四）の初年の頃のことだと聞いている。「あの伝之丞は町内の者であるので、間違いないことだ」と、祖父がむかし語りにかたてた戯言ざれごとである。この様なこともあるものだろうか。

- * 1 籾入ながいれ 桶のまわりの部分に、竹などで作った輪をはめること。ここでは、その職人。
- * 2 疝気せんき 漢方で、下腹のあたりが痛む病気。
- * 3 赤銅しゃどう 銅に、わずかの金と銀を混ぜた金属。色はむらさきがかつた黒。
- * 4 二回り 十四日間。服薬・湯治などで、七日間を一期と数える。
- * 5 才槌さいづち 胴の部分のふくらんだ、小形の木のつち。

〔参考〕この話と似た話が、「不思議な人湯者」と題して津村涼庵の『譚海』にある。伊豆修善寺の湯で出会った男に、疝気の治し方を教えてもらうが、翌日その男をたずねると、別人で、昨日のことは知らないという。教えてくれた男は、山神のたぐいだという。